

トルコ近代史に関する 国際シンポジウムと講演会

早稲田大学イスラーム地域研究機構トルコ研究班は、昨年度に引き続き、トルコ近代史に関する国際シンポジウムと講演会を開催した。本年度は講演会を、東京だけでなく京都でも開催し、関西在住の研究者や大学院生の関心にも応えようとした。他方、当初はトルコから3名の研究者をお招きするはずであったが、そのうちの一人ムラト・コラルテュルク氏（マルマラ大学）は、諸般の事情により来日できなかった。ここであらためてお詫び申し上げたい。

国際シンポジウム「近代オスマン帝国における軍事と福祉」（7月29日、於早稲田大学26号館702会議室）では、長谷部圭彦（早稲田大学）による趣旨説明の後、小松香織氏（早稲田大学）、ヌル

シェン・ギュルボア氏（マルマラ大学）、メフメト・ベシクチ氏（ユルドゥズ工科大学）による報告がなされた。小松氏は、官営汽船の個人記録文書に基づき、帝国末期から共和国初期にかけての年金制度の特徴を論じた。ギュルボア氏は、イスタンブールの汽船会社における年金を扱い、それが労使間の争点となり、国家がそれに巻き込まれていく過程を論じた。ベシクチ氏は、第一次世界大戦の傷痍軍人を扱い、共和国政府が彼らを意図的に軽視したのは、世界大戦の敗北を人々に忘却させつつ、独立戦争の勝利を強調するためであったと論じた。報告者を含め22名が参加した総合討論においては、徴兵制や年金や義務教育（昨年度の国際シンポジウムのテーマ）が対象とする人々



写真1 国際シンポジウム（於早稲田大学）



写真2 小松香織氏 (於早稲田大学)



写真4 M. ベシクチ氏 (於同志社大学)



写真3 N. ギュルボア氏 (於早稲田大学)



写真5 国際シンポジウムの会場 (於早稲田大学)

の範囲の、時代による伸縮と相互の重なり合いなどについて議論がなされた。なお、コラルテュルク氏の、大戦期の生活費に関する報告原稿は、バトゥハン・エルゲルディ氏(早稲田大学・院)によって代読された。

講演会は、早稲田大学(7月28日、於26号館1102会議室)と同志社大学(7月31日、於至誠館4番教室)で開催されたが、そこでベシクチ氏は、多様な宗教と民族から構成されたオスマン帝国における徴兵制を論じ、その特徴を、政治性、新旧の併存、強烈な抵抗という三点にまとめた。ギュルボア氏は、トルコとギリシアの住民交換(1923年)により、トルコに移住することとなったロマ(いわゆるジプシー)の人々に対する同化政策について論じた。報告者を含め、早稲田大学では20名、同志社大学では13名が参加した。

経済史を専門とするコラルテュルク氏が不参加

だったこともあり、そのような観点からの議論はわずかであったが、そのかわりに、ギュルボア氏とベシクチ氏の報告と質疑に十分な時間を割くことができた。例年以上の酷暑と台風襲来のなか三回も報告してくださったギュルボア氏とベシクチ氏、京都の会場を提供してくださった堀井優氏(同志社大学)、コラルテュルク氏の報告原稿を代読してくださったバトゥハン・エルゲルディ氏、裏方を引き受けてくださった早稲田大学の大学院生・学部生の方々、そして国際シンポジウムと講演会に参加された皆様に、あらためて御礼申し上げます。

長谷部圭彦
早稲田大学イスラーム地域研究機構 次席研究員